米欧亜回覧

第７４号
発行
特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会
編集委員会

四月二十日年次総会の講演は、浜矩子教授の講演「グローバルジャングルをどう生かすか」

四月二十日（日）午後一時半より、年次総会と講演会が学術総合センター会議室で開催される。

先ず、総会は事業および決算報告、そして新年度の方針と事業計画などの発表がある。

二時半からは、同志社大学大学院教授の浜矩子氏を講師に招いて、「グローバルジャングルをどう生かすか～国々の課題・人々の知恵」を汀間とした講演会が開催される。

1月5日の新年会「音楽で巡る岩倉使節団の旅」

浜矩子氏は『「アベノミクス」の真相』（中経出版）や「新・国富論」（文春新書）など多数の著書があり、国際・経済動向や「アホノミクス？」に関する執筆やコメンテイターとして注目を集めている論客である。関心のある友人知人も多いと思われるので、お誘いの上奮ってご参会ください。

新年会は斬新な趣向で大盛会
音楽で巡る岩倉使節団の旅」

本年の新年懇親例会は、通常より早く一月五日（日）に有楽町の外国人記者クラブで開催され七十五名が参加する盛会となった。

使節団がアメリカに向かう船上の「ポンケパーティ」に倣った平成十年以降、使節団訪問国十二か国に中国、インドと昨年の「日本」を加えた新年会の国別テーマが一巡し、今年は趣向を新たに、音楽によって使節団の「旅」を楽しく浮き彫りにした。会員の植木氏、西川氏と岩崎氏が中心になって企画した声楽、男声クァルテット、弦楽アンサンブルなど本格的なコンサートによって、大いに盛り上がった。

（詳細は二・三頁）

四月十九日、明治日本を創った岩倉使節団」、神戸でも講演会！

四月十九日（土）、神戸市立博物館（元正金銀行の由緒ある建物）で、当会主催・神戸市教育委員会後援による「映像講演」が行われる。これは一昨年、岩倉使節団百四十年を記念して「横濱開港記念館」で行われた催事に触発されたもので、世界一周を終えた一行が神戸に寄港し二泊していることに因んだものである。

この企画は関西支部長の難波康熙氏の尽力によるもので、泉三郎氏が初代の兵庫県知事だった伊藤博文に焦点を合わせながら開港間もない神戸の歴史とも合わせて「岩倉使節団」を語ろうという趣向である。当初、中学生を対象にとの話があったが、「孫と一緒に明治の歴史を学ぼう！」とシニア層にも呼びかけることになって話題を呼んでいる。

なお、正月十一日に、都心の城西大学で行われた講演会も大盛況で、会場に溢れた学生は別室でライブの映像をみることになった。一般に「歴史に学ぼう」という気運が醸成されつつあるとことを感じさせる。

「西洋は行き詰まる文明なり」
～久米邦武・晩年の洞察

泉 三郎

久米は「米欧回覧実記」で、西洋の科学技術文明を礼賛したが、一方で自由や利を重んじる個人主義文明に違和感を抱いた。米国の政治を見て「衆愚政治」の陥穽を察知し、欧州の経済をみて「道義」より「利益」を上位におく「町人国家」と評した。

久米は帰国後、歴史学の道を歩いたが、九十三才まで生きて西洋文明の半世紀を観察し、晩年、次のように述べている（「易堂先生小伝」より）。

「西洋人は物に執着して時に意外な発明をなすも、又その発明に執着して自縄自縛せらる。例えば、火器は亜細亜人の発明なるも、西域より欧州に伝え、西洋人の研究心を刺激して鉄砲となり、而して之を以て全世界を威嚇して暴利を収めたるも、暴利の争奪より同志討ちを始め、欧州大戦争となりて遂に自爆す。」

久米は七十歳代後半、第一次世界大戦の空爆などによる惨劇を目の当たりにし、文明興亡についてもこう書いた。「今や、軍備縮小を唱えて窮極を自白す。蒸気も電気も畢竟窮極する時あらん。明治五年吾人洋行の際は、欧州文明の破蕾の期にして、英人の眼中又世界なし。然るに、吾人の生存中に、已に英人の衰兆を見る。その間、僅かに五六十年に過ぎず、余りに果敢なき盛衰ならずや。東洋流は順天を説き、貧乏に平均す。西洋流は克天を説き、富豪を生ずるも、一方失業者に悩む」と。

今日、西洋文明は驚異の発明を続けて自縄自縛せられ、西洋流の克天主義はグローバルに展開して資源を収奪し環境を汚染し、利の争奪戦を競い合って、結果、物は溢れ情報は洪水の如く、貧富の格差は激化し、贅沢を貪る少数のスーパーリッチを生む一方で、膨大な数の貧者と失業者を生んでいる。

今、久米を甦らせれば何とのたまうか。なお「文明」といい「進歩」というか。

第70回 新年懇親例会

外国人記者クラブで二〇一四新年例会開催

音楽でめぐる岩倉使節の旅

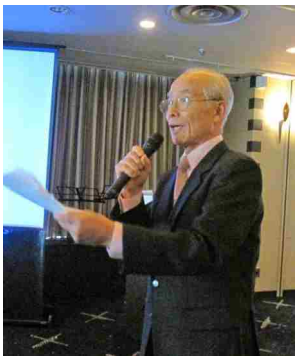
一月五日（日）皇居を見渡す素敵な日本外国特派員協会（外国人記者クラブ）に、会員ならびにその家族・友人・知人の七十五名が参集した。

米欧亜回覧の会に誠にふさわしいサロン・コンサートとして米国・英国・欧州ゆかりの音楽で、岩倉使節の旅を再現する新年例会となった。オープニングに「八十日間世界一周」が奏でられ、先ずは泉三郎代表（本会理事長）の開会の挨拶で新年を寿いだ。本会会員で英訳実記を読む会のリーダーの岩崎洋三氏がコンサートをプロデュースし、司会と興味深い解説をおこなった。同じく会員の植木園子氏、西川武彦氏がプログラムの構成を担う。コンサートのゲストとして東京芸術大学声楽科卒のメゾソプラノソリスト、北條加奈氏の参加を得た。同氏はカントニグロス国際音楽祭合唱部門で優勝される他、日本各地の合唱団やNHK東京児童合唱団のヴォイストレーナーとして活躍されている。更なるゲストとして、黒人霊歌を中心にICU（国際キリスト教大学）時代からの熟成されたハーモニーを誇るOGQ（Olden Gate Quartet）をお迎えした。小菅敏夫氏、池央耿氏、河村栄一氏、田中裕氏の四人はゴールデンゲートカルテットに憧れてOGQを結成され現在まで歌を続けておられるセミプロのチームである。

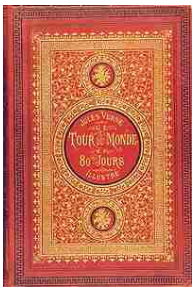
植木園子氏はコンサートのすべてのピアノを弾く役割を担うと共に、北條氏や弦楽アンサンブルを招じる等、岩崎洋三氏と共に全体プログラムの企画運営にまさに音楽監督として八面六臂の活躍であっ

開会挨拶をする泉代表

進行役は近藤理事


岩崎氏の司会と解説

ＯＧＱ（Olden Gate Quartet)男声クァルテット
小菅敏夫・池央耿・河村栄一・田中裕氏



80日間世界一周
（ジュール・ヴェルヌ）

メゾソプラノ　北條加奈さん（上）

ピアノ 植木園子さん（左）

Neujahr Trio 弦楽アンサンブルの
植木・臼田・田中さん（下）

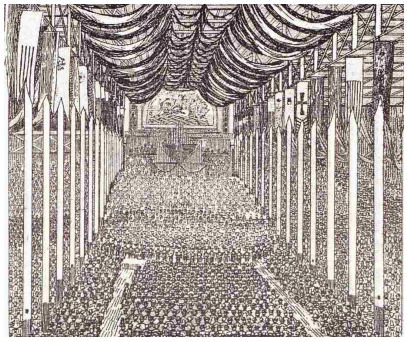
泉三郎代表と西川武彦氏による
ロンドンデリーの歌

長島有葵乃さんは中学生
（NHK東京児童合唱団）

た。因みに弦楽奏者は、植木潤氏、臼田慧太郎氏、田中美衣氏。歌はＮＨＫ東京児童合唱団の長島有希葵乃さん。更にデュエットはなんとお揃いの白いマフラーをたなびかせた泉三郎代表と西川武彦氏。映像（スライド）と音楽も岩倉使節の旅の順に米国が最初。岩崎洋三氏の解説でも、ヨハン・シュトラウスが振ったボストンのマンモス音楽会「太平樂会」に言及。英国では「ロンドンデリーの歌（ダニーボーイ）」、フランスでは「オー・シャンゼリゼ」が印象的。エンディングでは参会者全員が「エーデルワイス」、「故郷」のを合唱するなど、全体で曲目は二十曲を上回る一大ミュージック・パーティーとなった。会場からはこの様な音楽を中心にした企画催しを又是非実現して欲しいと云った声を聞いたのはうれしい限りであった。

楽しい歌と食事の間、大久保利泰氏、和田昭允氏、遠藤滋氏、倉本昌昭氏、山田哲司氏ほかの皆様よりご挨拶をいただいた。新年会の開催にあたっては、参会者の皆様、また小野博正氏（考証）、中山進氏（映像）、古俣美樹氏・兼子千尋氏（受付）、橋本吉信氏・小坂田國雄氏（撮影）ほか、本パーティー実現のために縁の下でご尽力いただいた多くの会員の皆様にも謝意を表したいと思います。

（文責）近藤　義彦



ボストン太平楽会（『実記』）

☆新会員自己紹介☆

新たに会員となった方の自己紹介です。

藤野君子

子供二人を育てあげ、はてこの先の人生は…と考えていた時、植木さんからご紹介いただき、歴史部会に参加、楽しさを知り、入会させて頂きました。考えるより先に行動する体質は、一生変わらぬ様で、昨年ラテンパーカッションも軽い気持ちで習い始めましたが、これが大変難しい楽器と、この半年で実感！でも、いつかはステージに！とかなわぬ夢を持っております。この会の皆様の向学心にあおられながら、後ろから少しずつ今ある日本の歴史を身に付けたく思っております。宜しくお願い申し上げます。

塚本弘氏

遠藤滋氏

太平楽会のプログラムを紹介する大久保利泰氏

「会議は踊る」について
山田哲司氏

和田昭允氏

中山進氏によるスライド映像

兼子千尋さんと古俣美樹さん

倉本昌昭氏の音頭で乾杯

「英訳実記を読む会」全百巻二月読了、Sir Ernest Satow、A Diplomat in Japan 輪読会」四月発足

英訳実記を読む会は、二〇〇二年二月に刊行された米欧回覧実記の英訳The Iwakura Embassy, 1871-73を、二〇〇三年一月十六日以来、毎月一回（除く八月）読んで来ました。本年二月に最終の第百章を読み終えましたが、なんと、百二十一回、十一年二ヶ月を要しました。一年十ヶ月で世界一周した岩倉使節団の記録を、その六倍もの時間をかけて読んだ計算になります。参加者は第一回が十名、最終回が九名、内「完走者」三人でした。小人数でしたので毎回分担して全文を音読すること、当番が用意した注記の日本語訳やコメント、原文や現代語訳と読み合わせながら、和気藹々と議論して来ました。久米の原文も魅力的ですが、英語音読もそれに劣らず心地よく感じました。効用を再認識しました。また、英訳者が久米の間違いを指摘することが少なくなかった一方、英訳者の勘違いを発見することも度々あり、東西のものの見方・考え方を知るのも楽しみのでした。

三月十九日に読む会発祥の地如水会館で開催した読了祝賀会には、The Iwakura Embassy, 1871-73を十年掛かりで刊行された日本文献出版の齋藤純生社長が駆けつけて下さり、翻訳出版の苦労話を承れたのは幸いでした。

なお、「英訳実記を読む会」は、四月から「Sir Ernest Satow、A Diplomat in Japan輪読会」に衣替えします。英文原著に加えて、日本語訳「一外交官の見た明治維新」（岩波文庫、上下）、萩原延壽「遠い崖～アーネスト・サトー日記抄」（朝日文庫、全十四巻）などを参照しつつ、幕末・維新が外からはどう見えたのかを探って行きたいと思います。

（文責）岩崎　洋三

英訳実記を読む会報告
担当幹事　岩崎洋三
Tel &Fax　03-3488-0532
iwasakiyz1116@gmail.com

■第百十九回
十二月十九日開催、Ch. 98　A Record of the Voyage through the Bay of Bengal
pp. 312-325
セイロンからベンガル湾・マラッカ海峡を経てシンガポールに至る六日間の航海の部分だが、上陸していないはずのカルカッタやスマトラについて「見てきたような」記述をしているが、久米の丹念な調査振りに驚かされる。

その一つはカルカッタとボンベイが鉄路で繋がり、東西交易の便が増したという部分だが、それが実現したのは一八七〇年で、それにより世界一周が八〇日間で可能になったとして、ジュール・ベルヌが「八〇日間世界一周」を書くことになるのだが、その主人公達がロンドンを出発したのが、岩倉使節団が英国滞在中だったのは興味深い。（もちろん片やフィクションの世界ではあるが、）

アッサム種の茶業について、過去十二年間に生産量が十五倍に拡大したことや、それでも茶畑用地はまだその九割が未利用で、壮大な増産可能性を示している。

スマトラの部分で、オランダがアチェ王国と戦ったアチェ戦争に付言しているが、十六・十七世紀にその様なイスラム王国が同地に栄えていた、さらにはオランダがジャワを海外の首都と遇していたことは興味深い。

（文責）岩崎　洋三

■**第百二十回**
一月二十二日開催。出席者五名。Chapter 99（支那海航程ノ記）

使節団は明治六年（一八七三）八月十八日、シンガポール入港、気温約二十八℃。実記では触れていないが、当時シンガポールではコレラが流行していたため上陸せず、港に停泊。翌日サイゴン（現ホーチミン）に向かい、二十二日サイゴン着、上陸のうえ市内観光しホテルで夕食後、宿泊は船。翌日出発し二十七日香港着。

この間実記では、当時人口十万（現在四百四十万）のシンガポールが英国によりマラッカのサルタンからお金で買い取られたことに触れた後、海からの景観や産物を説明する。人口百万（現在八千四百万）のベトナムについては古代から中世まで中国に支配された後、一時独立を果たしたが当時、仏保護領とされている歴史的消息を伝える一方、産物や経済活動など詳しく紹介。さらにサイゴン市中を見学した際にはヨーロッパとアジア世界の生活空間との違いを改めて気付かされたことを久米は記す。

なお、英訳版では久米がガンビア（皮なめし用のツル）をタバコと誤解していたこと、またサイゴン川をメコン川流域と取り違えていたことを英訳注記で指摘、われわれ出席者も地図で確認した。

（文責）大森　東亜

■**第百二十一回**
二月十九日開催、出席八名。Ch. 100　A Record of Hong Kong and Shanghai

第百章において、岩倉使節団を乗せた船は香港、上海を経て、明治六年九月十三日朝、ついに横浜港に帰着した。明治四年十一月十二日（陰暦。1871年12月23日に相当）に横浜港を出発した一年十ヵ月にわたる友好親善と視察調査の旅は大団円を迎えたのである。同時に、二〇〇三年一月十六日から始まった「英訳実記を読む会」の輪読会も英訳実記読了とともに最終回を迎えるに至った。初回から参加された三原浩氏、永島脩一郎氏、岩崎洋三氏のご三方には万感胸に迫るものがおありだったことであろう。後日開催された読了祝賀会の際に、上海滞在中に使節団が宿泊したアスター・ハウス・ホテルと、視察を行った上海老街、豫園および江南造船場について、三原氏が現地で撮影された写真を載せた解説レポートを配布して下さった。三原氏は読了祝賀会をもって輪読会をご退会されることとなったが、氏の鋭いご洞察に基づく興味深い問題提起によって、輪読会がさらに充実したものとなったことに対し心から感謝申し上げたい。三原氏には益々のご健勝をお祈り申し上げ、本稿の結びとする。

（文責）樫原　知子

グローバルジャパン研究会報告

担当幹事　塚本 弘
hiroshi.tsukamoto@eu-japan.jp

■日本近現代史とグローバル市民社会における日本の役割

十二月十四日開催。

《岩倉使節団『実記』と明治維新》

廃藩置県の後米欧十二か国へ派遣された岩倉使節団は、欧米先進諸国の富強の所以、わが国近代国家形成の在り方を探った。これは、明治維新の革新性を示す世界史にも類例を見ないイヴェントであった。明治維新はアジア諸国に期待と勇気を与えたが、日露戦争を契機に、アジア支配に向かった対外戦略は、その歴史的負の遺産を払拭できずに現在に至っている。

福沢諭吉は、明治維新の革新性を一方で評価しつつも、明治体制下の官尊民卑の制度・しきたりを批判し、これに迎合しない市民社会の建設を唱え、国民の独立自尊を訴えた。戦後憲法は、公務員を全体の奉仕者として位置付け、近代民主主義下の官僚制に進化したが、官主導に象徴される実態は社会の底流において存続し、新しい公共を形成する模索が続いている。今日、わが国政党政治の未成熟さを示す事例を幾多垣間見るが、十九世紀英国の啓蒙思想家サミュエル・スマイルズが言う「一国の政治のレベルは国民のレベルが決める」は至極名言として私たちに強く訴えられている。

《第三の開国とグローバル市民社会の形成》

明治維新、戦後改革・発展に続き、私たちは、いわば第三の開国、パラダイム・シフトに直面している。未完の明治維新、戦後発展の普遍性と限界を明確にし、グローバル市民社会の形成に如何取り組むかが現代に生きる私たちに強く求められている。

今日、グローバル社会の進展の中で、BRICSに代表される新興経済諸国は、世界経済牽引の成長路線を歩み始めたが、古い課題が未解決の中で、新しい課題に直面している。日本近代が置かれた世界史の中で、私たちは様々な経験を経てきた。その成功と失敗、工夫と克服、不作為の経験を世界、就中発展途上国と共有し、市場経済至上主義を克服し持続的発展を先導することが世界史における日本の役割ということが出来るのではないだろうか。

（文責）出井 亜夫

■日本の財政と税制を考える

二月八日（土）国際文化会館セミナールームで開催された。テーマは「日本の財政と税制を考える」、報告者は山田哲司氏、司会は塚本弘氏、出席者は十名だった。

当日は、前夜から降り出した雪が昼前から激しく降り積もり、交通機関も乱れ、参加を取りやめる方も出るなか、熱心な会員十名がご出席くださり、どうにか開催にこぎつけることが出来た。

報告は、問題の所在（今、何故財政・税制を議論するのか）、近現代史における財政・税制概観（明治維新以降）、平成二十五年度予算に見る日本の財政状況と問題点、戦後日本税制の特徴、税制の現状と課題、財政赤字への対応などのテーマにしたがって約二時間行われ、その後質疑応答に移った。今回は、対象とするテーマが大きく且つ多岐に亘っているため、論点を主として財政問題に絞り、そのなかで政治と官僚制度、財務省の権限、予算のチェック機能（機関）、政治家・官僚の資質など、多くの論点（問題点）が指摘され、議論された。それぞれが複雑な背景があり、検討すべき事項も多く、短時間内で、納得の行く結果を出すことは無理だったように思われた。また、税制問題には殆ど議論が及ばなかったこと、さらに大雪のため、帰りの交通機関の確保が危ぶまれたため十七時きっかりに終了するという時間的な制約もあって、幹事の小野氏と報告者の間では、やや未完に終わったとの感想が残った。今のところ五月ごろ第二回の報告会をおこなうことで調整中です。ご出席された方々には、お帰りの際ご苦労があったことと思います。「雪の研究会」の報告者として感謝いたします。

（文責）山田 哲司

■魅力あるジャパンを創る
―景観の構造改革

三月八日、参加者十七名、発表は西川武彦氏。

日本は、緑溢れる山河、海に囲まれて四季温暖という稀有な自然環境と景観に恵まれ、独特の文化が育まれてきた。江戸時代、特有の風物・風俗が来日外国人に賞賛された。維新後、脱亜入欧・富国強兵で先進国入りするも、暴走して敗戦、主な市町村は壊滅状態に。

戦後、グランド・デザインのない拙速な復興のなか、高度経済成長を走り、大都市への人口集中、地方の過疎化などの弊害を生む。列島改造で一律に景観破壊が進み、醜悪な看板・標識類が国中に溢れ、止まることなき電化拡大で、電柱・電線類が地上を醜く賑わしている。

後発諸国の経済成長が著しいなか、少子高齢化で人口の漸減は避けられない。中長期的に、グローバル・ジャパンが目指すのは経済の高度成長でなく成熟社会であろう。

電柱・電線類の地中化は、街路の拡幅を含め、初期コストが嵩み容易ではないが、景観は公共財との視点で、住環境改善、観光立国のためにも、国策として着実に進めるべきである。景観改造で訪客が倍増し、経済的に潤う例が続出している。

景観の構造改革は、土地柄に見合ったオシャレ心が肝要。清濁併せたクール・ジャパンが望まれる。道州制には景観環境の類似性などの視点も欠かせない。これをベースに、次のような意見が飛び交った。

・経済成長鈍化、人口減などで財源が細るなか、介護・保育施設などでの応需が先決になろうが、電柱・電線類の地中化、景観法を基盤とする拘束力ある景観規制など、二〇二〇年東京五輪を奇貨として行政がしっかりした指針を打ち出すべき。

・一個人としての市民の自覚、行動（ボランティア参加、寄付・寄贈など）も必要。

・地域活性化の一環として自治体の自発的景観条例制定と、団塊の世代の定年後の積極的参画が求められる。

（文責）西川 武彦

実記を読む会報告

担当幹事　小坂田 國雄
Tel&Fax 044-987-1531
osakadakunio5256@jcom.home.ne.jp

■第百七十八回

一月九日開催、久米名語録・朗読と寸評（II）

泉三郎氏の担当で、前回の「米国編」に続き「英国編」と「仏国編」の朗読と寸評が行われた。その一部を紹介する。

英国では「世界一の富強を誇るカラクリ」を学ぶことが大であたっとし、次のような語録が取り上げられた。

「当今欧羅巴各国、ミナ文明ヲ輝カシ、富強ヲ極メ、貿易盛ニ、工芸秀テ、人民快美ノ生理ニ、悦楽ヲ極ム、其情況ヲ目撃スレハ、是欧州の商利ヲ重ンスル風ノ、漸致スル所ニテ、原来此州ノ固有ノ如クニ思ハレルトモ、其実ハ然ラズ、欧州今日ノ富庶ヲミルハ、千八百年以後ノコトニテ、著シク此景象ヲ生セシハ、僅ニ四十年ニスキサルナリ」

そしてこう書き添える。

「東洋ノ西洋ニ及ハサルハ、才ノ劣ナルニアラス、智ノ鈍キニアラス、只済生ノ道ニ用意薄ク、高尚ノ空理ニ日ヲ送ルニヨル」。日本人は才能において劣るわけでもなく、智力が鈍いわけでもない。ただ、詩文だの書画だの空理に遊んで実学や工芸の勉強をしていなかったからだという。

仏国編ではもっぱらパリを主題にして**「市中ハ到ル処ニ酒店、割烹店、茶、珈琲店アリ、樹陰ニ榻ヲオキ、遊客案ヲ対シテ飲ム」**と風景を描き、**「文明都雅ノ尖点トナシ、巴黎ノ麗都ハ天宮月樹ノ想ヒヲナス」**と、まるで天国に来たようだと感嘆している。そして英京・仏都を比較して次の名句を残している。

「倫敦ニアレハ、人ヲシテ勉強セシム、巴黎ニアレバ、人ヲシテ愉悦セシム」

（文責）泉 三郎

■第百七十九回

二月十三日開催、出席者十名。42-43巻『パリ府の記』

パリはBC三年からセーヌ川の左岸とシテ島にパリジー族が居住したことから発祥の地とされ、AD三百六十年には「パリ」と呼ばれ始め、その後さまざまな都市整備がされてきた。岩倉使節団一行は一八七二年十一月イギリスロンドンからドーヴァー海峡を渡りフランス・カレーを経てパリに到着し、ロンドンとは全く異なる都市の姿を見て感嘆した。特に高さの統一された建築物、広幅員道路、綺麗な舗装道路、緑の街路樹、輝くガス燈、壮大な凱旋門、聳え立つ大寺院、コンコルド等の大広場、都市美観に圧倒された。実記では述べられていないが、使節団が見たパリは実はナポレオン三世と配下のオースマン・セーヌ県知事二人が一八五三年～一八七〇年にわたりパリを大規模改造した直後の姿であった。久米は「ロンドンでは市民が忙しく動き回っているのに比べ、パリでは市民が一つの公園に住んでいるようだ」「ロンドンは人を努力させる都市であるがパリは人を楽しませる都市である」「ドイツやロシアなどの多くの国民があこがれのパリの生活や習慣、文化を手本としたことが多かった」と分析している。さらにフランスでは評判の悪いティエール大統領に謁見した印象として、「魅力的な人だ」と逆評価している。一方、大図書館には日本の「曽我物語」や「太閤記」の珍本が所蔵されていることも明らかにしている。久米は日本との比較の中で日本を名指しこそしないが「思慮の浅い連中が古いものを破棄して新しいものを追いかけている」「西洋各地では古来の文化を大切にして現在光輝なものにしている」「古い事物や古跡から発掘された遺物を博物館で大切に展示している」などとも説いており、日本への的を得た批判をしている。また一行はヴェルサイユも訪問している。『実記』番外篇として、地下迷宮通路にかかわるエピソードと、一九六〇年代以降の大規模プロジェクトについても概略紹介した。尚、一九八四年秋パリでの国際会議の折フランス側の要望で、小生紋付羽織袴姿でヴェルサイユ宮殿での公式晩餐会に出席したが（本レジュメでは写真割愛）、日本人で明治以降同様な姿でヴェルサイユ宮殿を出入りした人が存在したのかどうか分からない。

（文責）堀江 興

■第百八十回

三月十三日開催、出席者十四名。61-69巻『サンクトペテルブルグの記』

産業革命と文明開化に繁栄する米、英、仏、プロシアを経て、ベルリンで内地に召還された大久保利通と別れて、岩倉使節団一行二十七名は、愈々ロシア首都のサンクトペテルブルグに至る。ここは北緯六十度の極寒の地にある雪と氷に閉ざされた都会で、季節は三月末から四月初旬。建物こそ欧米のどの都市にも劣らぬ豪華絢爛ではあるが、皇族・貴族が富を独占し、農奴が虐げられる社会構造を見て、改めて文明とは、開化とは何かを考えさせられる。領土は広大だが、不毛の土地が多く、うまく使い切れていないと久米は実感する。久米の記述も、相変わらず、政治、経済、地理、諸施設見聞の記載は細微を極めるものの、心なしか、はるばる長途の旅を、この極寒の僻地まで来た疲れと意気消沈した中弛みの気配も感じられる。会った皇族の名前もよく取り違えている。

久米は、日本はロシアを実態以上に恐れすぎているという。それは、幕末から再三再四、通商を求めて日本に来航した露使節が、幕府に面会を拒否されて、北海道などで騒擾を起こした風評が、実態以上に拡大されて、ロシア恐怖論が日本人の心に沁みついたとみる。その後、両国は不幸にして三国干渉を契機に、日露戦争に突入するが、使節団訪問時の日露関係は極めて、友好的であった。ロマノフ王朝の歴史、ピョートル大帝と中興のエカテリーナ二世の破天荒ともいえる事績や漂流民

から始まったとされる日露外交史などを辿りながら、最後は、極めて現代的な諸問題、ソチ五輪や、ウクライナ、クリミアの生々しい今も進行中の事件を取り上げて、北方領土問題、日露の経済、政治問題の今後やプーチンの思考法、安倍・プーチンの蜜月関係をどう見るかなどにも話が及んだ。久米実記のロシア編は、木戸日記と併せて読み進めると実記に登場しない人々の動向なども伺えて甚だ興味深い。（文責）小野 博正

歴史部会報

担当幹事　小野 博正

mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■榎本武揚～変革の時代の万能ピンチヒッター

二月十七日開催。榎本武揚は、主君徳川慶喜の恭順の意に逆らって、幕府艦隊を率いて箱館で戊辰戦争を最後まで戦い、黒田清隆率いる新政府軍に敢え無く敗れた話はポピュラーだ。しかし、その後新政府の要人として諸々の活躍をしたことについてはフォローされない嫌いがある。福澤諭吉が「痩せ我慢の説」で、「二君に仕えた」として勝海舟ともども非難したことの影響が大きそうだ。

箱館戦争に勝利した新政府軍参謀黒田清隆は、敗軍の敵将榎本の知識・経験を高く評価し、新政府に有用の人材として助命運動に命をかけた。その段階では福澤諭吉も助命に動き、二人の尽力で榎本は無事出獄、そして黒田の期待に違わず、第一次伊藤内閣の逓信大臣にはじまり、黒田・山縣・松方・第2次伊藤各内閣で農商務大臣・文部大臣・外務大臣を歴任したほか、駐露・駐清特命全権公使として、千島樺太交換条約締結、ペルーとのマリア・ルス号国際裁判解決、朝鮮問題に関わる天津条約等外交上の難題処理にも力を発揮した。

榎本は昌平坂学問所、長崎海軍伝習所で学んだが、変革の時代に「万能ピンチヒッター」と言われる幅広い活躍が出来た素地は、まずは父親榎本円兵衛武規（旧姓箱田良三）によって養われたようだ。福山藩の庄屋の次男として生まれた父親は江戸に遊学し、伊能忠敬の一番弟子になる。その後、幕府天文方になが、天文方には当時最先端の知識と人材が集まっていた。その縁で、榎本は江川太郎左衛門にオランダ語を中浜万次郎に英語学ぶ機会を得たほか、十九歳の時には、海防掛目付堀利熙（後箱館奉行・外国奉行）と勘定吟味役村垣範正（後淡路守・外国奉行・新見遣米使節副使）を中心にした蝦夷地及び北蝦夷（樺太）を巡見に、父親に代わって随行する機会を得た。榎本が後に箱館戦争を戦い、「蝦夷共和国」建国を試みたことや、恐露病克服に尽力する北への関心はこの頃培われたと見られる。

黒田清隆が敵将榎本助命に動いたことに限らず、榎本と出合った多くの人士が、以後榎本のサポーターになるのは榎本の人徳であろう。オランダ留学時には長崎海軍伝習所の教官だったカッテンディーケ（当時海軍大臣）やポンペが真摯に面倒を見たこと、駐露特命全権公使時代にはプチャーチン（当時海軍大将）やその副官ポシェート（当時運輸大臣）が便宜を図ってくれたこと、ポンペが外交顧問として二年間ロシアまで随行したこと、箱館戦争に多くが命運を共にしたことなど枚挙に暇がない。

榎本が駐露特命全権公使の仕事を全うして帰国する際に、豪華客船ではなくシベリア横断という困難な道を敢えて選んでいたことには驚かされる。日本人に蔓延する「恐露病」を正だすためにロシアの内情を詳細に調査・報告しようとしたものであった。まだシベリア横断鉄道は通じていない時代であり、サンクト・ペテルブルグからウラジオストックまで全行程一万二千キロの行程の内、鉄道部分はわずか千キロ、河川や湖の船舶が四千六百キロ止まり、残る五千六百五十キロは三頭立て馬車という想像を絶するハードな旅である。それも、自由な観察をするために付添案内人のオファーを断り、公使館の部下等日本人4人が馬車二台に分乗し、六十六日かけて乗り切っている。

箱館戦争以降の榎本の活躍はもっと注目されてしかるべきだろう。（文責）岩崎 洋三

関西支部報告

担当幹事　難波 康熙

namba@jttk.zaq.ne.jp

■第七十回

十一月十三日開催。第二編第三十六巻「舌非力（シェフィールド）府の記」

使節団は工場の生産規模に驚かされるが、実記に記された労働生産性は低い。数値に聞き違いがあったかも知れないが、英国鉄鋼をはじめとする工業製品の生産性は新興のドイツ、アメリカに比して低く既に相当国際競争力が落ちて来ていたことは紛れもない事実である。ともあれ当地のカトラーズ協会の宴会主客として招かれ、二百二十一人の大会食となった。

■第七十一回

二月八日開催、出席者七名。英国編・第三十七巻。

産業視察としての工場見学に多くの紙面を割き、専ら生産力に注目している。しかし、英国は世界の陸地の四分の一を領土として支配していた。その圧倒的な影響力は、世界システムとして広がり、今日のアジア太平洋経済圏の基盤にもなっている。

近年、研究が著しく進んだ「グローバルヒストリー」成果を生かした『イギリス帝国の歴史―アジアから考える』（大阪大学教授秋田茂著、中公新書）を副読本として読むことに決定した。この本は「2013年読売吉野作造賞」を受賞。多角的視点から英国を分析し、英国を牽引したのは産業力ではなく、ジェントルマン資本主義としての金融力であったとの記述もある。

日本は、英国と同じように島嶼国家、しかも頂点を過ぎた成熟国家であるとするならば、英国が歩んだ歴史を知り且つ多面的な視点から見ることで、日本の将来を考察するためにも非常に参考になると考える。

（文責）難波 康熙

特定非営利活動法人

「米欧亜回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会　員　趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回、全体例会があります。

部　会　テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙　年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役　員　理事長（泉三郎）他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局　「米欧亜回覧の会」
〒135-0021
東京都江東区白河 4-9-14-1407
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:090-4723-9705　FAX:03-3641-9407

入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5, 000円を頂きます。
なお年会費などのお支払いは下記のゆうちょ銀行口座への払込（振込）をご利用ください。

00180-2-580729　特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ　等
また、書籍・ＤＶＤ案内もあります
http//www.iwakura-mission.jp
＊お知らせ欄も時々チェックしてください

＜催し案内＞

2014年4月～6月の予定です

☆平成26年度会員総会

日　時：　4月20日（日）13:15～16:45（会場13時）
第１部：　13:15～　年次総会
第２部：　14:30～　講演会
講　師：浜矩子氏（同志社大学大学院教授）
テーマ：グローバルジャングルをどう生かすか
～国々の課題・人々の知恵
場　所：学術総合センター会議室
千代田区一ツ橋 2-1-2
会　費：2, 000円（学生 1, 000円）
＊浜氏参加の懇親会　新世界会館 17:15～19:30
会費5, 000円（定員あり）

☆実記を読む会

日　程：　4月10日（木）小坂田氏「第66、70～71巻」
5月 8日（木）桑名氏「第72～73巻」
6月12日（木）芳野氏「第74～78巻」
時　間：14:00～
場　所：国際文化会館４０１号室（会費：1, 000円）

☆Sir Ernest Satoh,A Diplomat in Japan輪読会

第１回：　4月16日（水）14:00～
場　所：銀座ルノアール・マイスペースニュー
新宿3丁目店2号会議室

☆グローバルジャパン研究会

日　程：
時　間：13:30～16:30
場　所：国際文化会館403号室（会費：1, 000円）

☆歴史部会

日　程：　4月21日（月）「明治十四年の政変」
（大久保啓次郎氏）
5月19日（月）「日露戦争―資金調達の
戦い」（板谷敏彦氏）
時　間：18:00～21:00
場　所：国際文化会館４０４（会費：1,000円）

☆関西支部例会

日　時：4月19日（土）
場　所：神戸市立博物館ホール
会　費：

◇

編集後記

（N）